甲南大学経済学会
編集委員

GAKKAI NEWS 第1号

2011年6月

総会

5月11日、甲友会館で平成23年度甲南大学経済学会総会が行われた。そもそも、総会とは経済学会全体の1年を締めくくる重要な場であり、また1年の始まりです。甲南大学経済学会総会では以下のことを行いました。

議題は①平成22年度活動報告、②平成22年度決算報告、③平成22年度会計監査報告、④平成23年度評議員の選出、⑤平成23年度監査委員の選出、⑥平成23年度活動方針の提案、⑦平成23年度予算案の決議の7つで、上記の活動報告などはすべて過半数の拍手によって承認されました。総会には240名が出席し、451名が委任状を提出しました。出席者の多くは1回生で、2・3回生はほとんど出席していませんでした。少しの遅刻者はいたが、1回生は静かに話を聞いていました。1回生は手元の資料と評議員の話を真剣に聞いていました。新しく選ばれた評議員は自覚と責任を持った面持ちでした。議長の機転により、総会はスムーズに進行されました。

以上を平成23年度甲南大学経済学会総会の報告に代えさせていただきます。

(A.T)

砂村賢記念図書賞

5月11日、あいにくの天気の下、甲友会館にて甲南大学経済学会総会は行われた。甲南大学経済学会総会は、総会と砂村賢記念図書賞の受賞式からなる。今回、私はその中で砂村賢記念図書賞について記したいと思う。

砂村賞と略されることの多いこの賞であるが、そもそもこの賞が制定されたのは、在官中に亡くなられた、故砂村賢甲南大学経済学部教授の遺志を継いでのことであった。

現在甲南大学経済学部に在籍中の学生のほとんどは、上記のことを知らないであろうと思われるが、この経緯は重要であると思うので記しておく。

さて、砂村賞の内容を説明しよう。砂村賞は、成績優秀な4回生を表彰するものである。今年は3人選ばれた。ところが、当日に受賞式に来られたのは1人だけであった。

ここまで読んで、後の2人はどうなったのかと心配になった人には、安心していただきたいのだが、もちろん、後日、5号館5階の経済コモンルームにて、当日に甲友会館で甲南大学経済学部長の永廣先生が渡されたものと全く同じものをお渡ししている。

1学年400人近くの学生の中から選ばれる賞であるので、選ばれた学生は本当によく学業に精励され、素晴らしいと思う。

(H.O)

講演会

私にとって今回の講演はとても考えさせられるものでした。とてもすばらしい講演でした。

今回の講演で私は差別をなくすこと、簡

単な手でもいいから多くの人が手を差し伸べることが貧困者を減らす大事なことだと思いました。

私は貧困者を減らすにはまず、本人が立ち直りたい、助けてほしい、(仕事を手に入れてからは）もう戻らないという意思を持つ事、周囲がちょっとしたことなら手を差し伸べるという考えを持つ事、社会の貧困者に対する考え方を「社会の役に立たない人」「おちこぼれ」ではなく「私が手を差し伸べたら立ち直れるのではないか？」「すぐに立ち直れる人」という風に認識が変わる事、これらの変化があれば、貧困者は９割方減り、代わりに労働者が増えるのではないでしょうか？

彼・彼女に仕事を斡旋する方法も個人の自由に任せるのではなく、まずある程度限定して、そこから選んでもらって訓練する、という方がいいと私は思います。例えば、介護や農業、林業などに絞り、まずは一通り簡単に体験してもらい、次にその中で一番合う仕事を重点的に訓練していき仕事についてもらう、という風に私は思っています。理想が入っていますが、私は貧困者を差別するつもりはありません。それを広げられたらと思っています。

(S.I)

経済学会総会後に「貧困」をテーマにした講演会があった。私は貧困といえばホームレスを連想する。ホームレスといえば大阪がメッカだ。なにしろ全国のホームレスの半分の約 2 万人が住んでいるらしい。ホームレス人口が大阪に集中しているのはなぜだろうか？大阪市は他の都市よりもその人たちにとって住みやすい所なのかもしれない。そういえば大阪市の扇町公園（JR 環状線の天満駅近く）にはホームレスの人たちの集落が出来あがっている。公園に設置されている水道栓の周りに、青いビニールシートで住まいを作りインスタントラーメンを作って食べていたりする。

以前、ネットカフェで放火があり、客が何人も死んだ事件が大阪の難波であり、マスコミでも大きく報道された。被害者の多くはいわゆる「ワーキングプア」という人たちであり、ホームレスあるいは１～2 歩手前の段階だとすれば、現在サラリーマンや学生をしている人たちの数パーセントはホームレスの予備軍なのだ。ホームレスやワーキンプアは、マルクスの言うところの「ルンペンプロレタリアート」に相当するものだろうか。いつの時代の社会にも虐げられた人たちの層があるものだ。

家に住んで働いている人たちの大多数はお金持ちになる夢もはかなく、人生を過ごし、裕福になれない社会状況である。サラリーマンもそこから抜け出して飛躍できない人が多い現状からすると程度の差はあれワーキングプアなのかもしれない。

(Y.K)

今年度の会場は甲友会館ということで、聴講者には窮屈に感じたと思います。当日に提出していただいたアンケートでも、そのような感想がありました。空席を探す際にも難儀されたでしょう。

しかし、講演会では狭いゆえにレクチャーをよりリアルに聴けたと思います。本編終了後に設けた質問時間にも、マイクを通して対面型でトークを出来ました。スピーカーとの距離を縮めることで、学べる内容

が増えたかと感じました。

今回の講演会のテーマは「貧困を考える」でした。比較的に衣食住が整い、さらに大学で勉強が出来る私達。それが日常となっているため、または一つのキャンパスという小さいコミュニティーにいることが大半であるために、生きるうえで不自由のない環境が当然だと「錯覚」しがちだと思います。事実、私自身、錯覚しています。ゆえに今回の講演では発見ではなく驚きが多々ありました。貧困者支援という名詞は耳にするが、その現場については全く認識していなかったからです。

特に強調して話されていた内容が「若年野宿者の増加」です。私達と同年代の層も例外ではありません。原因は推測として、近年の不況により収入が不安定であるためだと思います。親が貧困者であれば、被扶養者である子どもも同じ状況下に置かれるという負の連鎖が発生してしまうのです。

少なくとも現在の日本経済が競争主義であり、ゆえに所得格差が生まれることが原因の一つでしょう。しかし改善も容易ではありません。すべての年代が関連する、この課題に触れることはこれからますます重要になってくるではないでしょうか。

(D.K)

5月11日に生田武志氏をお招きして、講演会を開催しました。

その中ではご自身の人生についてありのままをお話ししていただきました。

生田さんは飾り気のない方で、終始穏やかに大学生時代から現在までの野宿者の方との関係についてお話ししていただきました。

野宿者の方との交流のための夜回りを行い、声をかけ、自らも野宿者になり共同で生活した経験もされました。活動として野宿者の方が再就職できるよう斡旋してくれる団体や生活保護を受給できる受付窓口を紹介する等、幅広い活動を続けておられます。

私が特に印象的だったお話は、ある年配の野宿者の方との交流についての体験談です。

その方に生活保護を紹介すると、「まだ人のお世話になりたくない」と言いました。その言葉は「自分のことは自力で出来るから、必要ない」という意味です。これは生田氏が頻繁に耳にする野宿者生活を続ける理由の一つであるそうです。

私はこれまで野宿者であることはやむを得ないことで、可能ならば正規で就職したいという願望を持ち、家で生活したいが支援を受けていないのだと思っていました。しかし、その予想は正反対だったと気付きました。

今回の講演では野宿者に対し、間違った固定観念を抱き、ゆえに視野が狭かったことを理解しました。また多くのメッセージを受け取り、上級生である私にとっても実りのある講演会でした。

(Y.H)